

春日部福音自由教会 2020年7月12日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）
聖書 新約聖書 マルコの福音書8章11節～21節
説教 「イエスが誰か、わかったか？」小野信一牧師

おはようございます。2020年7月12日、主の日の礼拝を共にささげています。先週7月5日から三会堂の礼拝を再開いたしました。今日はそこから2週間目ということになります。週ごとに礼拝の場が開かれていて、集まることができることは感謝なことでもあります。しばらく集まることができませんでしたが、今日は3つの会堂に集まり共に礼拝をささげています。なお家に留まって礼拝を捧げている方もおられることと思います。

復活した主イエス様が、“さあ朝の食事をしなさい”と言って弟子たちを招かれました。毎朝のはじまりに、そして毎週のはじまりに、私たちは主イエス様の食卓に着くように招かれています。今朝も呼ばれて招かれて共に食卓に着きます。主イエス様のもてなしが用意されています。

今ここにいるのは40数人でしょうか、これからの礼拝の中でひとつ考えなければならないのは、賛美の声のことかなと思います。もちろん間を空けて換気をして座っていますけれども、多くの人が一緒に歌う、長い時間大人数で歌うことはリスクが高まることですので、今は賛美の歌を少なくして、3曲だけ、それも一節だけにしています。ともに声を出して歌えることは感謝ですけれども、合唱とか、そういうものの感染率がどれくらいか、科学的な分析をまだ見たことがありません。オーケストラと管楽器の実験をしてデータを取っているのは見ました。トランペットとかホルンとかを吹いて、まあこの距離なら大丈夫でしょう、ということをやっていたのですが、歌うことについてもデータが出てくれば、と思っています。今のところは最大の声で歌うのではなく、また小さく弱く歌うのでもなく、ピアノシモかメゾピアノぐらいで、しかしフォルティシモと同じ力で、しっかりと心を込めて、ひとつひとつの言葉に心を込めて歌う賛美をできればと思います。

さて今日はマルコの福音書8章11～21節までが朗読されました。もう一度お祈りをささげましょう。

天の父なる神様。今私たちはあなたの御前に出てともに賛美と礼拝を捧げております。一人一人が御前に携えてきたからだのいのちを、あなたへの捧げものとしてお受け下さい。一人一人の礼拝をお受けください。今あなたの前に出て、あなたの声を聞こうとしております。聖書が朗読されました。イエス様の声を聞かせ、イエス様のお心を教えてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

I “イエスとは誰なのか”～二つのアプローチ～

マルコの福音書は次々と色々な場面が展開していきます。移動したり旅をしたりしながら、今日の場面に来ています。“イエスとは誰なのか”ということ福音書は伝え続けています。私たちは聖書を読む時、そのことを心を開いて知ろうとします。心を開いて聞き、また見ようとしていると、だんだん見えて、聞こえてきます。

しかし一方で、すぐには分からない、ということもあります。12弟子もそうでした。もち

ろんパリサイ人たちも分からないという状態でした。しかしパリサイ人だけでなく、12 弟子もなかなか分からない、なかなか悟らないのです。私たちも同じであろうと思います。なかなかすぐには分からない、しかしだんだん分かってくる、見えてくる、そのように主イエス様が十二弟子を連れて、また私達を連れて、一緒に歩いていてくださいます。

1) イエス様にしるしを求め、試そうとするアプローチ

“イエスとは誰なのか”を知ろうとする、問おうとする、二つのアプローチがあるように思います。イエスというのは誰なのか、それを知ろうとして近づく人たちの中にです。

ひとつは 11 節から出てくるパリサイ人たちのことです。彼らもイエス様のところにやって来た。イエス様に近づき、会話を始めます。議論を始めたと書いてあります。彼らは「天からのしるし」を求めています。つまり彼らはイエス様のところに来て、疑いながら証拠やしるしを求め、また試そうとして、「イエス様あなたは誰なのか」と問いかけて近づくアプローチをしています。イエス様はそれを聞き、「心の中で深くため息をついた」のです。これは単に心の中でというよりも、新改訳聖書の脚注を見ると 12 節の脚注に“あるいは「ご自分の霊において」と書いてあるように、イエス様の心において、霊において、深いため息、深い嘆息をなされた、ということです。嘆かれたのです。深く嘆き深く呻いた。「なぜこの人たちは、なぜこの時代は、しるしを求めるのか」。そういう思いでしょう。イエス様は続けてこう言われました。「まことに大事なことを、本当のことをあなたがたに言います。今のこの時代にはどんなしるしも与えられないだろう。あなたがたが求めているしるしは与えられない」。パリサイ人たちは、「私が納得できるようなしるし、あかし、証拠を示してほしい、イエスよ、もしあなたが本当にメシアだ、救い主だと言うならば、その証拠を私たちにわかるような形で、納得できるようにしるしを示してほしい」と求めたのです。しかしイエス様は「あなた方が求めるようなしるしは決して与えられない」と言われます。

“心が頑なであった”とは、心が固くなっていた、柔らかくなかった、と言っても良いでしょう。「心が頑なになっている」という言葉が、この後の 17 節に出てきます。これは弟子たちに対して言われた言葉です。「弟子たちよ、あなたがたもまだわからないのか。あなたがたも心を頑なにしているのか」。パリサイ人たちも心を固くしていたということでしょう。彼らはしるしを求めています。本当にこの人がメシアだと言うならば、それを分かりたい、分かったならば、証拠があるならばそう受け止めようと頭では考えています。しかし大事なことを見逃しています。神が与えたしるし、神からのメッセージ、神の言葉であるお方がそこにいるのに、それを見逃し聞き逃しています。自分の選ぶしるしを見せてくれと要求しても、その求めに神は応じません。そして今そこに神の選んだしるしが来ているのに、心が固いので見逃すのです。チャンスを逃すのです。私たちはこれを見てですね、こういう形の証拠があれば、データがあれば、自分は納得できる、と思ったとしても、自分の心と頭を柔らかくすることを学ばなければならぬかもしれない。心を柔らかくして、自分の求めるしるしでなく、神のくださるしるしに、心の波長や心の向きを合わせるようにすると良いのだらうと思います。

例えばみなさんの家にテレビのアンテナがあるとしたら、どちらに向いているでしょうか。スカイツリーの方を向いているのか、それとも大宮の方ですかね、どこかにあるその発信する

方に、その向くべき方向を向いてれば、電波をキャッチして情報が入ってきます。でもそれがずれると何も映らなくなる。私たちも神様が示そうとしている大事なことに心の向きを合わせる。そうすると、だんだん見えてくるのです。ひとつ見えてくるのは、「今ここにおられるこの方こそ、神からのしるしだ」ということです。

旧約聖書のみことばを開きましょう。イザヤ書 7 章、特に 14 節ですが、10 節以下のところを見たいと思います。預言者イザヤの時代、ユダの王アハズの時代に、こう主が言われた。「主はさらにアハズに告げられた。『あなたの神、主に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。』アハズは言った。『私は求めません。主を試みません。』」。しるしを求める、証拠を求める、というのは神様を試みることに、試すことであって、してはいけない、よくないことだと言われていたわけです。今日は聖書交読で詩篇 95 篇を読みましたが、モーセの時代、出エジプト記にイスラエル人たちがつまずき、神様を試そうとした、ということが書いてある。心を頑なにしたという時のことが書いてある。アハズは「そういうことを私はしないのだ」と言ったのです。しかしこの時は神様の方が「しるしを求めよ」って言われたのですよね。でもアハズは、ちょっとなんというのでしょうかね、基本的には神を試みないのは正しいことだと思うのですが、ちょっと頭が固かったのかもしれないな、と思います。イザヤは言います、13 節。「さあ、聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神までも煩わすのか。それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。」この時は神様がご自分の方からしるしを与えようとお決めになったのです。神様の方が「しるしを与える」と言われたのです。どんなしるしだったのでしょうか。「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」それが神様が与えようとしたしるしでした。この男の子、インマヌエル、神我らと共にいます、と呼ばれる男の子、処女が身ごもって産む不思議な男の子。私たちはそれが降誕祭の前、待降節に読まれる御言葉であるということを知り、新約聖書を持ち、知っているのです、それがつまり、主イエス・キリストご自身であると知っています。

キリストご自身、主イエスご自身が神が与えると決めたしるしなのです。その方が今、パリサイ人たちの目の前にいます。弟子たちの隣にいます。しかしパリサイ人はそのことに気づくことができません。パリサイ人はしるしを求めています。その求めは、彼らの霊的盲目を映し出しています。神が与えるしるしであるお方がそこにいるのに、それを理解できない、そして自分たちが選ぶしるしを求めるのです。神が選んだしるしが、今ここに来ておられる。それなのに「私が納得するような、私が選んだしるしがないとダメなのだ」と彼は言っているのです。神からのしるし、神様からのメッセージそのもの、生きた人格として現れた神のことばである御子キリストが来ているのに、それを受けず、理解せず、別のしるしを求めています。パリサイ人たちはそうだったのです。

イエス様はどうしたのでしょうか。イエス様は「彼らから離れた」と書いてあります。「あなたがたの求めるようなしるしは与えられないのだ」とイエス様が言われた。それを彼らが聞いて、ちゃんと受け止めて、自分の心を変えようとしていたならば、どうだっただろうか。イエス様は離れなかったのではないかと想像します。でも彼らは固かった、というか心を変えるこ

とができなかった。イエス様はパリサイ人たちを離れて行かれました。「再び船に乗って向こう岸へ行かれた」とあります。そして 22 節には、「ベツサイダに着いた」と書いてありますので、また船で湖を横切って行く旅を再び始めます。

2) 「イエスとは誰なのか」に驚き、知りたいと思うアプローチ

一方、弟子たちがいます。天からのしるしである方がそこにいてくれるのです。しかし彼らは彼らでピントがずれています。焦点がずれています。船の中で弟子たちは「パンを持ってくるのを忘れた」ということに気がつきます。おそらく 13 人、12 弟子とイエス様が乗っているその船の中に、何時間かの旅、半日ぐらいの旅でしょうか。「しまった、パンを持って来なかった」。パンを積まなかった、これから食べるものがない。「パンがひとつだけしかなかった」ということが書いてあります。彼らはそこで、食べるパンがあるとかないとか、足りるとか足りないとかいうことを話し始めるのですね。しかしイエス様は「そういうことが問題なのではないのだ」と言われます。「なぜパンがないこと、パンを持っていないことについて互いに話し合っているのか。そこが問題なのではない」。イエス様は、「人はパンだけで生きるのではなく神の口から出る言葉によって生きる」というみことばで誘惑を退けたことがありました。今、神のことばそのものであるお方がここにいます。同じ船の上にあります。でも弟子たちはそのことにまだ気がつきません。「しまった、パンを忘れてしまった」「何で忘れちゃったのだろう、準備が悪い、段取りが悪い」とか言ったのかもしれない。そしてまた、おそらくは「悪いのは誰なのだ？パンを持ってくるはずの係は誰だ？誰がミスしたのだ？」というようなことに心を奪われてしまっているようです。そういうことに心を奪われるとですね、大事なことに気が付かない。彼らは今なお導かれている途上です。この後だんだん彼らも気がついてくる。

彼らが本当は焦点を当てるべき大事なことって何だったでしょうか。それはパンを持ってくるのを忘れたとか、パン種のことというよりは、本当の「いのちのパン」とは何なのか、誰なのかということ。天から降ってきて世にいのちを与えるもの、それがいのちのパンなのだ”ということ。そして「わたしがいのちのパンなのだ」とイエス様が言われた、そこが大事なところ。その大事なことに気づいていくように、弟子たちは導かれている途上です。その大事なところに焦点を当てることができるように、イエス様が今一緒に旅を続けながら、「このことに気をつけなさい、それが大事なことじゃないのだよ」と言って弟子たちの心を耕し、石を取り除いておられるようです。人間の心の中にはいろいろな心配ごとや、何が問題なのか、問題を見つけてそれを追求するとか、誰が悪いのかとか誰が偉いのかとか、そういうことに關心を持ってですね、ずれていく、焦点がずれていく、ということがあります。しかし、そういう人の心を神様ご自身が耕し、石を取り除いてくださる。

例えば、旧約聖書のイザヤ書 5 章 2 節に、ぶどう作りのこと、ぶどう畑を持つ人のことが歌われています。それは正に神様が神の民に対してなそうとされていることです。「彼はそこを掘り起こして、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。」。土を掘り起こし、石を除いて土を柔らかくし、邪魔なものを取り除いて櫓と葡萄の踏み場を作って、ぶどうがなるのを待ってい

た、というのです。「ところが、酸いぶどうができてしまった。」と旧約聖書は伝えています。甘いぶどうがなるのを待っていた、でも酸っぱい葡萄になってしまった。何故そうってしまったのか。神様の嘆きが旧約時代にもありました。イエス様が弟子たちと一緒に船の旅をしている姿を見ると、同じようにして、石を取り除き、心を耕してくださっているように見えます。

「イエスとは誰なのか」と問いかけて近づくアプローチのひとつは、疑いながらしるしを求めて試そうとして近づく、問いかけるということでした。二つ目は、驚きながらワクワクしながら、感動し心を動かされながら、イエス様をもっと知りたいと近づくアプローチです。

例えばガリラヤの嵐のとき、嵐が来て静まったときに彼らは言いました。「この方は一体誰なのだろう？ 風や湖までが言うことを聞くとは」。“Who is this man？”それを追求し知りうとし続けました。“この方は一体誰なのか？”そこが大事なところ。ここから弟子たちも、この8章の後半に向けて、更に神様の、イエス様のお取り扱いによって、大事なことが見えていくようになっていきます。私たちもそうです。イエス様のお取り扱いの途上です。ここからまた少しずつ知ることになるのです。

Ⅱ 妨げになるパン種に気をつける

さてイエス様が15節で言われた言葉に戻りましょう。パン種の話が出てきます。私たちが大事なところに焦点を当てるために、妨げになるものがあるというのです。

ここに妨げになるパン種が二つ出てきます。イエス様は「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種にはくれぐれも気をつけなさい」と言われました。パン種って何でしょう。パンを焼く時に小麦粉で生地をこねて、私はパンを焼いたことがほとんどないですけども、自分でパンを焼く方は分かるかもしれません。パン種、イースト菌でしょうか、発酵させるものを入れるわけですね。そしてすぐ焼くのでしょうか、そうではなくて時間を置くのですね。置いておくとそれが生地全体に影響を及ぼして、時間をかけて全体を膨らませる、それによってパンが柔らかくなる、ということでしょう。

種を入れないパンっていうのは急いで作るので発酵させない、柔らかくない固いパンのことです。パン種は、量はわずかでも生地の中に混じって入り込むとその全体に影響を及ぼす。時々イエス様の話の中にパン種が出てきます。良いパン種もあるでしょうけど、悪いパン種のことが多いです。「パリサイ人のパン種に気をつけなさい」。そういうものがあなたがたの中に入り込まないようにしなさいっていうことですね。

1) パリサイ人のパン種

ひとつ目はパリサイ人のパン種。どんなパン種なのでしょう。見てきたようにしるしを求める、自分の見方で、自分の納得の仕方で、納得できるような証を求めるという求め方。またイエス様を試そう試みようとするという態度、本当にメシアなら証拠を示せ、というのですね。でもその証拠が示されてもおそらく本当には信じたり従う気はないのでしょう。

この出来事と並行する箇所がマタイの福音書にもあります。またルカにも参考にすべきところがあります。マタイの16章12節を見ますと、パリサイ人のパン種とはパリサイ人の教え

のことだとわかります。パリサイ人のパン種とは「彼らの教え」のことなのです。彼らは律法の学者です。旧約聖書の学者です。旧約聖書を学び教える、それは良いことです。しかしそれだけではなくて、様々な規定を定めていました。旧約聖書と、それだけでなく言い伝えも含めて、解釈を細かく定めて、決まりを守らせようとする、そういう教えだったのです。そしてルカの福音書 12 章 1 節を参考にしますと、「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい」とあります。彼らのパン種とは偽善だった。偽の善、上辺の善です。彼らは規定を定めて人に守らせようとしませんが、自分でそれを守らないというようなことがありました。マルコの福音書 7 章の 6 節前後のところに、「口では神に近いけれど心では遠い」という旧約聖書の言葉が引用されていました。彼らは仮面をかぶるような信仰深さ、敬虔深さでした。一言で言うと、パリサイ人のパン種とは「偽りの敬虔」。表面的な信仰深さです。そしてそこでは「神が自分の望む方法でしてくれて当然だ」と考えてしまう。そしてそうしてくれなければ神をも非難する、というような心の態度でしょう。

2) ヘロデのパン種

一方、ヘロデのパン種はどういうものだったのでしょうか。これは「神を恐れたり敬ったりしなくても良いのだ」と考えてしまう、「神を無視する」、そういう態度です。ヘロデのパン種とは、姦淫や殺人、安易な誓い、見せかけの敬虔です。ヘロデは男女関係において乱れていました。人を殺したこともありました。安易な誓い、娘になんでもあげると安易に誓ったために、「バプテスマのヨハネの首」と言われた時に、その人を殺させました。「教えを受けたい」という、表面にはそういう態度がありました。しかしその実は、キリストとその先駆者であるヨハネを憎む思いがあり、一言で言うと「神なしで良い」とする態度でした。ヘロデは高ぶってへりくだりに欠けていたのです。モーセの時代、エジプトの王ファラオの心が頑なであったのに、何か似ているようにも思います。

私達は心が柔らかくされる必要があります。別の言い方で言えば、心が砕かれる必要があります。しかしそれをパリサイ人は理屈で拒んだり、ヘロデは自分の持つ権力故に拒んだりする、そういう人達でした。それぞれの仕方で神を侮る人達でした。もし私たちの中に、表面的な信仰とか、高ぶりとか、そういう似たものがあるとするならば、「私の心からこれらのパン種を取り除いてください、これらの石を取り除いてください」と祈りましょう。それが入ってきたまま、それを心に入れてしまって入ってきたまま放置すると、時の中でそれが膨らんで私たちの人格全体に影響を及ぼすこととなります。パリサイ人やヘロデのパン種が膨らんで影響を受けると、「イエスとは誰なのか」を、素直に心柔らかくして見ることができなくなります。自分の納得できる仕方でないと思ってしまう。だからイエス様は「気をつけよ」と言われたのです。

Ⅲ 弟子たちから離れないイエスさま

そしてパリサイ人に対しては、イエス様はどうしたかって言うと、離れたのですよね。弟子たちもまた 17 節 18 節を見ますと「なぜあなたがたはそんなことを議論しているのか。大事なそれはそれじゃない。まだわからないのか。まだ悟らないのか。」と、そして「心を頑なにしているのか。目があるのに見ていないのか。耳があるのに聞いていないのか。あなたがたは覚

えていないのか。忘れてしまったのか。」と、もう、次から次へ畳み掛けるように厳しいことを言われています。イエス様は弟子たちのことも嘆いておられます。「まだわからないのか」と嘆かれるのですね。

でもここでひとつのことに気がつきます。イエス様は弟子たちのことも嘆いていますが弟子たちからは離れていないってことです。パリサイ人たちから離れ、再び船に乗って向こう岸へ行く時に、弟子たちは船の中に一緒にいたのです。パリサイ人達からは、自分を切り離して離れていったのですが、弟子たちとは一緒に船に乗って一緒に旅を続けた。なお一緒に歩いてくださるのです。

私たちも「自分の信仰はダメなのかな」って思ったり、素直になれないとか、この信仰では駄目なんじゃないか、という思いになる時がある。けれど、その時に思い出しましょう。イエス様は弟子たちからは離れなかったのです。12人は今、イエス様を知る道の途上にいます。なおイエス様と近くにいて歩み続けながら、だんだん見えてくる、だんだんわかってくるのです。そしてわかったと言えるように、導かれていきます。その道の途中にいるのです。私たちもそうです。「自分の信仰は弱いな」とか、「ダメだな」って思うことがあったとしても、私たちは捨てられていません。一緒にイエス様が連れて行ってくださるのです。しかし時間がかかります。まだわからないのかってイエス様が言われるように、私たちも言われてしまうかもしれませぬ。イエス様って誰なのかわかるのに、目が開かれるのに時間がかかる。でも「時間がかかってもしよから見なさい。聞きなさい。悟りなさい。」とされているのです。

クリスチャンホームで生まれた人達がこの中にもいますよね。幼い時から教会に来ている人がいます。例えば生まれて二十年経ったならば、そして二十歳になったならば、それぞれが「ああ、イエス様ってこういう方なのだ」とわかるように、何か自分なりにイエス様のことをつかむというか、わかることができるようになっていって欲しいな、と願っています。

大人になってから教会に来た人も同じように、10年、20年経ったならば、イエス様と歩み続ける中で、「イエス様ってどういう方なのか」ということをつかめるようにと願います。10年なり20年なりの、「イエス様が分かった」ということがあるだろうと思うのです。さらに長い時間を経たならば、その時間なりの、今だからわかった、イエス様の知識、イエス様への告白があるだろうと思います。イエス様について、神様について全部は分かりませぬ。少なくとも地上にいる間は。でもイエス様が分からせようとしてくださる。

IV 「イエスが誰なのかわかったか？」と問われ、何と答えるか

福音書を読んでいきますと、「イエスが誰なのかわかったか？」と問いかけてられているように思います。今日のあなたは何と答えるでしょうか。「イエス様は〇〇〇の方です」。今日の自分なりの、それぞれの応答をしていただければと思うのです。「イエス様は私にとってこのような方です」と。イエス様が「まだわからないのか、わかるようになれ」と言われます。

聞く人の中で、「イエス様のことがはっきりと分からないな」って思う人がいるかもしれませぬ。イエス様は言われます。「あなたがたは何を見たのか、それを思い出しなさい。わたしが5000人のために五つのパンを裂いた時、あまりがいくつのかごに満ちたのか。4000人の

ために7つのパンをされた時はどうだったか、いくつだったか」。イエス様が数字を挙げて具体的に尋ねます。「あの日あの時あの場所で、あなたは何を見たのか、何を経験したのか、思い出しなさい。あなたがこれまでに見たこと聞いたことによって、大事なことがわかるはずだ、あなたが経験したことを、見たことを聞いたことを思い出せ。まだ悟らないのか。悟るようになりなさい。そしてこれからも私についてきなさい。来て見なさい。来なさい。そうすれば分かります」と今も主イエスは、私たちを招いていてくださいます。もし「自分の心は頑なになってしまっているのだろうか」と思う人がいるならば、“主よ、私の心を砕いてください”と祈ってみましょう。

私たちは何かしるしを求めているのでしょうか。しるしはもう十分に与えられています。聖書の中に。そしてあなたの人生の中に。すでに経験したこと、見たこと、聞いたことがあります。神が選び、お与えになるしるしは、御子イエス・キリストです。嵐の経験、みなさんの人生の中で嵐の経験があったでしょう、凧の経験があったでしょう。私たちは共通の困難を通して、また個別の苦難を通して、歩んでいます。「この方は一体誰なのだろう」と問い始めて、それから色々な経験をしてきました。少しずつ経験や知識が確信に変わっていきます。“イエスを見続けよ、聞き続けよ”と言われていきます。イエス様が言われます。「あなたは何を見たのか、忘れてしまったのか、思い出しなさい、まだ悟らないのか、悟るようになりなさい」。

お祈りをささげましょう。

天の父なる神様。共に礼拝をささげられる恵みを感謝します。“イエスとは誰なのか”という大事な問いに、一人一人が答えることができますように。何を見たのか、悟れ、と言ってくださいます。私たちに悟りをお与えください。私たちの心を守り、心を砕き、耕してください。悟らせてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン